

## 加々美論文について

馬場毅

加々美論文について、いろいろと啓発される点が多いが、同時に違和感を抱く点もあり、ここでは、その点を私の専門である歴史学の立場に立って述べたい。ところで私は「地域研究」は、インターディシiplinary(学際的なもの)であり、あくまで諸学問科学がそこで出会う「アリーナ arena」(広場)にとどまるという立場に立っている。

まずオリエンタリズムについて関連して、戦争直後、歴史学研究会を中心に行われた、世界史の基本法則を中国史に適用しようとする試みを取り上げたい。そこでは戦前、戦中の時期、中国史に対してマルクス主義的方法論によるアジア的生産様式概念を適用した試みが、西洋や日本は時代の進展による発展段階を経たのに反して、古代から近代までの中国社会の停滞性という歴史認識をもたらし、戦前、戦中の日本人の中国への蔑視観を相まって、帝国主義日本による遅れた半植民地中国への侵略に対しての論理的な批判にならなかったという反省を含意していた。すなわちそこにはオリエンタリズムという言葉を使わずして、中国に対してオリエンタリズムの思考で考えることに対する批判が内包されていた。

それは、スターリンにより定式された原始共産制、奴隷制、封建制、資本主義、社会主義を中国も経ていたことを証明するものであった。無論この歴史発展段階説は、西洋をモデルにしているのであるが、中国でも西洋と同じような歴史発展段階を経ていることを証明しようとするものであった。またその当時の歴史的背景として、中華人民共和国が1949年に成立し、それが社会主義を目指すことが明白になったということがある。ただスターリンによって定式化された原始共産制から社会主義までの時期に世界のどこでも、単系発展するという西洋社会の歴史発展から抽出された議論を中国史にそのまま適用するには無理があった。たとえば中国には、秦の始皇帝以来、西欧社会のような封建制(feudalism)が廃止され、皇帝による中央集権的な官僚制が行われた。そのため宋代を、中世封建制であるという仁井田陞と近世であるという宮崎市定の間で行われた宋代の土地所有の性格をめぐる議論も、足立啓二が指摘しているように、封建制は農奴制に、農奴制は地主制に矮小化されることになった。またギリシャ・ローマに代表される典型的な奴隷制を、中国史に適用することにも無理があり、そのため秦漢古代帝国以後を爵制的秩序で議論する西嶋定生の議論とか、齊民制で議論する木村政雄の議論などが生まれた。

ただたとえスターリン的単系発展論がそのまま適用されないことが証明されたとしても、それによって中国社会に対して、オリエンタリズム的認識を持つことには結びつかず、むしろ中国社会の独自性を認めていくことになった。そしてその延長線上に、最近の議論として、朝貢システムで中国とアジア社会を考える浜下武志の議論とか、中国社会の江南な

どある特定の地域を研究する「地域研究」を提唱する森正夫の議論が生まれた。また近代史の議論として、従来の半植民地半封建概念では、中国近代における資本主義的發展を認識できないという奥村哲、足立啓二の議論が生まれた。その他に、1949年の中華人民共和国の成立の質的意義を従来ほど重視せず、中華民国との連続性を重視する最近の近代史研究の動向がある。そこでは資本主義に比較して社会主義を發展段階として高位とする認識に対する疑問が含意されている。

また中国の研究が、学問的に、理論的に低いと考える傾向については、中国では文革時に学問が完全に政治の僕になり、かつ外部からの情報から隔絶されていたことの後遺症的な側面が、ある時期にはあったと思う。しかしながら1978年の改革開放の開始以後29年経過し、中国の学术界は様変わりした。1910年代の新文化運動に例えられるように、多くの外国の思想・理論が流入している。歴史学の分野でも日本とは比較できないほどの多くの欧米や日本の研究書が翻訳されるとともに、直接、原文で研究書を読む学者が増えている。そして外国の研究との対話の中から、多くの学問的にも、理論的に優れた歴史研究が行われている。問題はこのような中国学术界の現状を直視していない日本人研究者側に問題があると思う。

そのほかに、加々美論文の指摘しているような①研究対象がAALA諸国であり、②原則的に国策指向的な性格をもつ、という「地域研究」が日本に成立しているのかという点は疑問である。加々美論文は、「アジア政経学会」の例を挙げているが、その創立者がそのような傾向を持っていたとしても、現在の「アジア政経学会」の会員の研究が、総体として実態としても「国策指向的な性格」を持っていると思えない。むしろ地道な基礎研究が大変多いのではないだろうか。

最後にコ・ビヘイビオリズムという加々美論文の提起に対しては、これは対象に対する学問的な分析方法論というよりは、研究態度の問題だと考えている。